

# 陳舜臣さんを語る会通信

No.148 Jan. 2026

発行 兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34

橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」

Tel. 078-911-1671

編集 「陳舜臣さんを語る会通信」 編集委員

発行日 2026年1月1日

## 陳舜臣さん自作の漢詩集『風騷集』『澄懷集』『麒麟の志』

陳舜臣さんの自作漢詩集といえば、『風騷集』（1984 平凡社）、『澄懷集』（愛蔵版漢詩集 1986 成瀬書房）、そして『麒麟の志』（詩をまじえたエッセイ 1993 朝日新聞社）があります。

『麒麟の志』「まえがき」ほぼ全文

傍線は加筆



朝日文芸文庫表紙

千支で年をかぞえる方法はずいぶん古く、三千年以上も前の殷の甲骨文にすでに用いられている。六十種の組み合わせがあり、十干と十二支のそれぞれの最初を合わせた「甲子」は、すべてのはじめりというかんじがする。

私が生まれた一九二四年はその甲子にあたっており、阪神沿線につくられた球場もその年に完成して、「甲子園」と名づけられている。六十年後の次の甲子の年、すなわち一九八四年はいまでもなく私の還暦ということになる。

平均寿命がのびて、還暦を祝うのが気恥ずかしい時代になったが、先人から伝えられた行事には、やはり敬意を表すべきであろう。私も身内だけでささやかな還暦の祝いをして、その記念に私家版の漢詩集を贈ることを考えた。その印刷を平凡社に依頼したところ、公刊するようにすすめられた。あるいは、そのかされたと言ったほうがよいかもしれない。臆面もなくその誘いに乗って、絶句二十首、律詩八首、詞八首をおさめた詩集

を『風騷集』と名づけ、たしか三千部ほど刷ったと記憶している。

それが昨日のことにようにおもえるのに、私はもう古希を迎える年になった。古希はかぞえの七十なので、還暦から九年たったことになる。朝日新聞社から、「もうだいぶ詩が溜ったでしょう。古希記念の詩集をつくりましょう」と、お誘いを受けた。

ありがたいことだが、私は気分転換のために詩を作ってきたのであり、そんなものを詩集として世に問うのは、やはりおこがましいことだとおもう。そこで詩をまじえたエッセイという形にすることにした。中国の友人たちのいう「詩話」のたぐいにほかならない。

じつは『風騷集』の二年後、私は調子に乗ったとしか言いようがないが、『澄懷集』と題する詩集をそつと出した。百十三部という超限定本なので、ほとんど人目にふれていないはずである。



平凡社『風騷集』表紙

『風騷集』のあとがきの日付は、甲子歳首となっているから、収録作品はとうぜん甲子以前のものである。このたびの古希記念の詩話は甲子以後のもので、最終の句をとって『麒麟の志』と名づけるこ

とにした。よく詩を作った年もあれば、多忙のためほとんど作らなかった年もあるが、ほぼ十年間の筆のすざびである。



『澄懷集』（和装本）表紙  
左は乙丑篇、右は甲子篇

■『澄懷集』は百十三部しか発行されておらず、まず、私たちの目に触れることはないと思っていたのですが、『天空の詩人李白』に甲子篇、乙丑篇併せて収録されています。ぜひ、こちらでお読みください。



『天空の詩人 李白』  
（講談社）表紙

# 陳舜臣さんは「日本文壇でならぶ者のない漢詩の名手」司馬遼太郎



燈籠茶屋  
(既に廃業)

いつものように茶店で紅茶を飲み、七言絶句を五首読んで、それから帰ることにした。  
(傍線は加筆)

## 『燃える水柱』の記述

小学校入学前後のころ、祖父から、兄篤臣（とくしん）の相伴で、幼児教育のテキストである『三字経』や、『小学』『詩経』の素読の手ほどきを受ける。絵入りの『三国志演義』、『水滸伝』にも興味を持つようになる。

## 小さなころから漢籍の素読

## 司馬遼太郎『街道をゆく 25 (閩のみち)』に登場する陳舜臣さん

### 「対々の山歌」

福州北方の山中、シヨ一族の村（福湖村）でのことです。

「ずいぶん、この村のひとに世話になったが、お返しするものがない」

といったのは、物事の気配りのいい森浩一教授である。だから陳さん、司馬さん、なにか字を書いてゆけ、といった。私は愚筆で無芸だから遠慮をし、陳舜臣氏を説得した。

あまり知られていないが、このひとは日本文壇でならぶ者のない漢詩の名手である。あるいは、中国の作家同盟のひとたちの間に入っても、このひとほど古格な詩をつくれるひとがすくないのではあるまいか。

紙が展べられ、陳氏はたちどころに筆をとった。おろん、即興である。

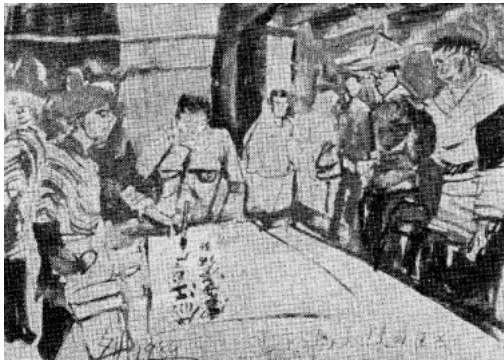
岱江滔滔響雷声  
雲海蒼烟路幾程  
対対山歌無數夢  
福湖村裡過清明

岱江滔々として 雷声響き、雲海蒼烟、路は 幾程ぞ、対対（ついつい）の山歌に 無数の夢、福湖村裡清明を 過ぐ。シヨ一族の歌垣のことを、べ

つに、「対歌（ついか）」ともいう。

その「対」をとって「対々の山歌」と音感的に情景化したところが、この詩のいいところの一つである。

その上、福湖村裡でのびやかに清明節の日をすごした、という結句に、俳句に似た季節感が息づいている



### 「雷峰を過ぐ」

泉州北方、陶磁（やきもの）の町、徳化に着いた夜のこと。

その夜、和平さんは表情をあらためて陳舜臣氏の部屋を訪ね、詩を乞うた。たまたま私は同室にいた。陳氏は便箋を前にしばらく考えこんでいたが、やがて「張和平君ノ郷還ヲ喜ブ」と題する七言絶句をつくった。

世務牽纏身不輕 幾年夢到徳化城  
雷峰雨急樟溪乱 難撫張郎懷旧情

世務牽纏トシテ身輕カラズ（張さんはいつも仕事が多とわりついていて、しかも身は軽くない）。幾年夢ミテ徳化城ニ到ル（幾年も徳化の町に帰ることを夢みて、やっとそこにきた）。

雷峰雨急ニシテ樟溪乱ル（ところが実家のある雷峰は急雨のかたにあって見え、足もとに樟溪の水音がかれの胸中と同様、乱れている）。撫シ難シ張郎懷旧ノ情（われわれにはこの張君の懐旧の情をどうしてなだめていいかわからない）。

「謝謝」和平さんは詩を拝し、やがて便箋を丁寧に折りたたんでポケットに入れた。

■上は、『街道をゆく 二十五』（1985 朝日新聞社）挿絵より転載。「1984 年」書かれる陳舜臣氏の書き入れあり。

■右の記述にある張和平氏は著名人のようだ。水上勉『北京の柿』にも登場している。

■ここで取り上げた二首は、いずれも『澄懷集 甲子篇』に入っている。『天空の詩人 李白』p. 105、109

## 『風騷集』 目次及び巻頭の一首

## 目次

回 顧	和林則徐「塞外雜咏」韻
苦薩蠻	敦煌好
西域南道行	
新 疆 行	
和吉川幸次郎先生韻	
登 廬 山	
眼 鏡	
人 工 島	
讀紅樓夢 其一	
讀紅樓夢 其二	
憶秦娥 心琴	
抱 孫	
那爛陀遺跡所懷	
偶 成	
舊金山唐人街有感	
長相思 飛過崑崙	
鷺巢山 Alamut	
浪淘沙 鷺巢城	
波 斯	
烏夜啼 波斯	
伊斯坦堡	
新安水底出土文物 於韓國光州博物館	
祝招女士在北京開展覽會	
和夏簫先生韻	
長崎眼鏡橋	
烏 龍 茶	
長安石馬歌	
羅馬舉杯歌	
新嘉坡花葩山	
新嘉坡談史	
清平樂 新嘉坡懷古	
(下の段へ続く)	

祝『人民中國』三十周年  
寫完曼陀羅之人有感

看『茶館』

寄梅影女士

讀後有感

和龔自珍「己亥雜詩」三一五首韻

完結『中國歷史』十五卷有感

菩薩蠻 七夕

北野町三本松不動坂

意 識 塵

蝶戀花 抱負

あとがき

「あとがき」 抜粋 (傍線は加筆)

気分転換のため、私はときどき詩を作る。漢詩には脚韻、平仄、對聯などの規則があり、それにあてはまる表現をえらぶのは、一種の頭の体操でもある。仲間たちがゴルフや麻雀で気分を転換させるように、私も作詩でそれをはかった。おかげで、まずは仕事をつづけることができ、ありがたいとおもっている。この機に書き散らした詩を集め、知友の笑覧に供しようと思ひ立った。あまりにも内容が私的にわたるものを除き、なるべく近年の作をえらび、四十三首を得た。絶句二十七首、律詩八首、詞八首である。もともと私家版のもりだったが、平凡社に公刊をすすめられた。作家となった以上、自分の心象風景をできるだけ読者にさけ出す覚悟をもたねばならない。

## 回 顧

## 回 顧

少小風騷值亂離

少小、風騷あれど亂離に値い

他鄉負笈薄冰危

他鄉に笈を負い薄冰危うかりき

青春過隙無人覺

青春、隙を過ぎ人の覺る無く

朱服點頭名漸馳

朱服點頭して名漸く馳す

白晝瓊枝誰撓折

白晝に瓊枝誰か撓折せし

黃昏草合影開遲

黃昏に草合わりて影開くこと遅し

把儂千劫襟懷事

儂が千劫の襟懷の事を把り

深鑄心中無字碑

深く心中の無字碑に鑄せん

風騷 『詩經』「國風」と『楚辭』「離騷」。文学のたしな

みのこと。

負笈 笈は本箱。笈を負うとは遊学の意。

朱服點頭 文章が選に入ること。

瓊枝 うつくしい玉のような枝。

若いころ 私はいささか風雅を慕うころはあったが、動乱の時代に逢い、他郷に学ぶという不安定な日を送った。すきまをすぎる駒にたとえられるように、青春はまたたくうちにすぎ、ひとは私を知らず、私も時のすぎ行くのを知らなかった。文学の賞をもらってから、ようやく名が知られたが、もうたそがれはじめていたのである。太陽がさんさんと照る真昼、人びとはさきに美しい花の咲き誇る枝を折りとり、夕暮には、のこされた大地に、草は茂り、まじり合い、それをおしひろげても、どうやら光がさしこむには遅くなりすぎたようだ。それだけに私の胸のうちは、かぞえきれないほどのおもいが満ち、そして溢れそうである。誰の心のなかに、もまだきざまれていない碑があるだろう。私はそこにわがおもいを、深くきざみつけておきたい。それをこれからの自分の仕事にしたいとおもう。



## 『風騷集』こんな七言絶句も

## 祝招女士在北京開展覽會

招女士北京に在りて展覽會を開くを祝す

朱墨研成好刻彫

朱墨<sup>と</sup>研ぎ成して好<sup>よ</sup>き刻彫

招君織手耀華僑

招君の織手は華僑を耀<sup>かがや</sup>かす

長留友誼分毫際

長く友誼を分毫の際に留め

意匠更新百卉瑤

意匠も更に新しく百卉<sup>かがや</sup>瑤く

神戸在留の美術家の招女士は、東京美校（現東京芸大）を卒業し、版画の道ひとすじにいそしました。公害というテーマにしばった作意は、現代に肉迫している。北京で個展をひらくときき、祝意を詩に託した。

この詩は魯迅（一八八一—一九三六）の「畫師に贈る」（一九三三）を意識してつくった。

かつて中国の暗黒時代

魯迅は朱墨を研<sup>す</sup>って

未来の中国—春山をえがいてほしいとうたった

招さんは朱墨を研り成し

みごとな版画を彫られた

そのかぼそい手で

私たち華僑のために気をはいてくださった

中日の友誼も彼女のこまかなわざのなかに

長く留められるであろう

魯迅は意匠を新たにせよと画家に希望した

招さんはたしかに新しい意匠—公害をとりあげた

春山ではないかもしれないが

さまざまな草花が

そこにみだれ咲く日を願う心がこめられている

## 招瑞娟氏の版画

私（橘）は神戸華僑歴史博物館の学芸員として左のポスターの行事に携わった。その経験から、上掲漢詩に非常に興味を覚えた。招瑞娟氏（一九二四—二〇二〇）は、広東省生まれで、三歳のとき父親の事業の關係で来日、神戸中華同文学学校に学びます。

陳舜臣さんと同じ年ですが、お二人が、神戸の華僑社会にあつて、どの程度、親しかったのかは知りません。

ところで、『招瑞娟版画集』の年譜を見ますと、一九八三年の欄に、中国美術館で中国美術家協会主催「招瑞娟版画作品展」

とあります。

陳さんの漢詩にある「招女士在北京開展覽會」はこれを指していると思われます。

上の文中、「北京で個展をひらくときき」とあるので、日本に居て、魯迅の詩を意識しながら詠まれた一首ということなのでしょう。

美術評論家の高橋亨氏は、招瑞娟氏の版画を次のように評しています。

「招さんが版画で見せる内面の強さがどこからうまれるかは分析しうることでないにしても、若いころ影響をうけたという祖国中国における魯迅の木刻運動と無縁でないことは十分想像できる」

2022年春節祭特別展

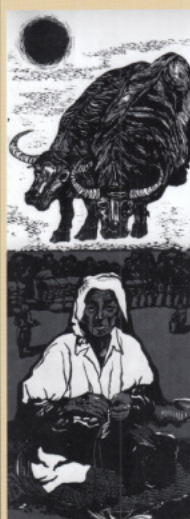
版画家詹永年協賛・神戸華僑女流版画家

## 招瑞娟遺作展



2022年1月26日(水)～2月26日(土)

開館曜日：水・木・金・土（祝祭日を除く）  
ただし2月6日(日)は開館  
開館時間：10時00分-17時00分（最終入館16時30分）  
入場料：300円（学生・65歳以上は200円）  
後援：南京町商店街振興組合



神戸華僑歴史博物館  
Kaie Chueen Chinese History Museum  
〒650-8024  
兵庫県神戸市中央区東川崎町1-1-1 KCCビル4F

神戸華僑歴史博物館協賛特別展  
主催：神戸華僑歴史博物館  
後援：南京町商店街振興組合  
協賛：版画家詹永年

